

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 5 月 28 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24792495

研究課題名(和文) 広汎性発達障害の子どもと家族へのFamily Problem Solvingの検討

研究課題名(英文) Evaluation of Family Problem Solving Training for children with Autism Spectrum Disorder and their Mothers

研究代表者

奥野 裕子 (OKUNO, HIROKO)

大阪大学・連合小児発達学研究所・講師

研究者番号：40586377

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：高機能広汎性障害と診断された子どもとその両親も合わせた家族に対し、Family Problem Solving Training(FPST)を実施し、FPST前後の子どもへのアンケート「対人的自己効力感尺度」「ストレスコーピング尺度：Stress Coping Scales：SC-S」、両親に対する「家族の自信度アンケート」「子どもの行動チェックリスト(Child Behavior Checklist；CBCL)」「ソーシャルスキル尺度(Social Skill scale)」「対人応答性尺度(Social Responsiveness Scale：SRS)」を指標にその有用性を検討する。

研究成果の概要(英文)：Introduction: This research sought to evaluate the influence of Problem Solving Training on children with ASD and their families. Method: Family Problem Solving Training(FPST) was used for 12 children with ASD, and was performed in small groups of 3-4 children and their parents. The effect of FPST on children was assessed by using the Interpersonal Self-Efficacy Scale (SE-S) and stress coping scales(SC-S). The effect on parents was assessed using four scales: the child behavior checklist (CBCL), the confidence degree questionnaire for families (CDQ), the social skill scales, and Social Responsiveness Scale(SRS). Results: Among the CBCL sub-items, the scores for "thought problems" improved significantly after FPST ( $P < 0.05$ ), and CDQ scores for fathers increased significantly after FPST ( $P < 0.05$ ). Conclusion: The results indicate that FPST is useful as an intervention program for children with ASD and their parents.

研究分野：小児発達

キーワード：自閉症 問題解決 家族支援

## 1. 研究開始当初の背景

日常の問題を解決する特殊な方略を指導するための心理教育的介入としては、Problem-Solving Training (PST) があるが (D'Zurilla, 1986) これまで自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorder) の子どもを対象にした実証的研究はなされていない。そこで、我々は、生活上の問題やストレスに自主性を持って対処するのに難しさを抱えている ASD 児とその親に対して、PST のアプローチを展開すべく、「発達障害をもつ子どもとその親に対する問題解決プログラム (研究スタート支援)」を実施した。学童期低学年～高学年の ASD 児とその親を対象に、其々が遭遇するであろう問題解決場面での問題解決に取り組む PST の結果では、親の自信度、子どもの行動問題 (特に外向的問題)、子どもの問題解決の対処で改善があった。

一方で、子どもの自己効力感の改善は顕著ではなく、ストレスコーピングに関しては、半数の事例で「回避」と「諦め」の対処がみられた。本 PST においては、子どもがトレーニングの中で問題に取り組んだとしても、生活場面での現実の解決に向かう際には、何らかの要因が作用し、十分な自信を持たず、否定的な対処スタイルに留まっていることが示唆された。D'Zurilla (1986) も、社会的な場面での問題解決 (社会的問題解決) 技能を評価する際には、問題解決能力 (問題解決に必要な技能の知識あるいは所有：問題解決 (プロセス)) と問題解決遂行行動 (これらの技能を自身の特定の問題に適応すること：問題解決の所産) の区別が重要といっている。また本来「問題解決」とは、個人や集団が問題への解決を発見するプロセスとされているが、解決策を実施する遂行行動に繋げるには、遂行する技能の欠如、情緒の抑制や動機づけの弱さへのアプローチも必要と示唆されている。特に、こういった困難さを

有している ASD 児では、この面へのアプローチが重要と考える。つまり、社会的問題解決においては、問題への解決策に向かう認知・感情・行動のプロセスで定義され、「1：問題指向的認知」、「2：特異的な問題解決技能」、「3：基本的な問題解決能力」の3つの変数レベルが、問題解決遂行に際して、其々異なる作用を示すとされている (D'Zurilla, 1986)。先の研究で PST 後に「回避」や「諦め」の否定的な対処スタイルを用いた結果をみると、ASD 児では「1：問題指向的認知」としては、般化に向かう促進的なものではなく、抑制的なものに留まり、これが問題解決遂行に影響を与えているものと考えられる。ここで D'Zurilla (1986) は、一方が認知した意味や意義、情動が、他方の認知の性質や感情に影響を与えると、より良好な感情や取り組みにつながる行動が生起すると云っている。よって ASD 児では、より身近にいる家族と一緒に問題解決に取り組むことで、家族の互いの問題指向的認知がより良い影響を与えうると考える。また、彼らは、日常で解決が必要な問題に向かうにも、ストレスが多いこと、また葛藤や不確かさから動機づけが弱まったり、自身の統制がきかないことで問題解決の遂行に影響を与えている可能性が大きい。この点においても、より効果的な遂行に向けて、子どもの情動の自覚や統制もはかるべく、子どもが家族と一緒に「自己モニタリング、自己評価、自己の強化」に取り組むことが有用と考える。

最後に「3：基本的な問題解決能力」については、Spivak ら (1976) も、問題解決に必要な認知能力として、「問題の感受性 (問題が存在しているということを認識する能力)」、「代替的思考 (代替可能な解決策を産出する能力)」、「手段-目的思考 (目的に達するのに適切な手段を概念化する能力)」、「帰結思考 (帰結を予想する能力)」、「パースペクティブ獲得 (他の人のパースペクティブで

状況を知覚する能力、共感能力)」を定義している。ASD 児では、知能指数が高くても、社会性、コミュニケーション、想像力の障害ゆえに、これらの能力の何れかの段階で課題を抱えている可能性がある。よって、これらの各能力について、段階を追った、より具体的指導が要される。

このような背景より、特に、「1：問題指向的認知」と「3：基本的な問題解決能力」へのアプローチを図るべく、家族と一緒に、子どもが「日常生活場面で現実に起こった問題に取り組む」ことで、各プロセスにおいて、子どもがイメージが可能な問題に取り組み、その都度、子どもには効果的な正の強化が与えられ、また、成功につながるときには、それを家族一緒に評価されることで、今後の問題遂行行動の強化、課題に取り組む動機づけを強める機会となり、より効果的な問題解決の遂行が可能となると考える。先の実証的研究を見ても、家族全体に向けて実施された、より日常生活場面での現実の問題に対する問題解決の遂行につながるスキルのトレーニングの有効性についてはまだ検討されていない。

以上のことから、本研究では、ASD 児とその家族にとって、それぞれの共感的かつ協調的な学習の促進、日常生活場面での現実の問題へのスキルの般化、またより望ましい対人関係上の葛藤への対処、望ましい行動の維持、強いては、家族機能の向上を目標に、ASD 児とその家族全体が問題解決の遂行に取り組む Family Problem-Solving Training(FPST)の実施を計画した。本研究の学術的な特色・独創的な点、及び予想される結果と意義としては、FPST による子どもを含む家族全体への介入の有用性を確認することにより、本邦における ASD 児を含む家族に対する問題解決遂行に特化した有効な支援方法の開発が期待できる。

## 2. 研究の目的

本研究では、自閉症スペクトラム障害と診断された子どもとその両親も合わせた家族に対し、Family Problem-Solving Training(FPST)を実施し、その有用性を検討する。

## 3. 研究の方法

### (1)対象

対象は、大阪大学医学部附属病院小児科外来通院中の患児 12 名(平均年 11.8±1.1 歳、男児 9 名、女児 3 名)とその保護者 12 名とした。12 組のうち 5 組が、両親ともに参加し、母親のみの参加の際には、母親が FPST の資料等を持ち帰り、父親と共有することとした。DSM-5 にて自閉症スペクトラム障害 ASD と診断され(IQ85 以上)、参加保護者は、重篤な精神疾患や知的障害を有さないことを前提とし、グループセッションである FPST の実施に支障がないと判断したものとした。

### (2) FPST プログラム内容/実施手順

FPST は 6 段階プログラムを 1 シリーズとし(3 日間：3 段階セッション/1 日×3)、各グループ少人数の 3~5 家族で行い、合計 12 家族に実施した。FPST の実施内容/実施手順の概略は、セッション 1 問題の同定、2 解決策の検討、3 解決策の選択・実施結果への予測、4 解決策の選択、5 計画の実行、6 結果の評価(努力への評価)とした。FPST 実施内容と評価の客観的評価を得るため、各セッションには、医療機関の医療従事者である補助研究者が 1 名以上同席することとした。また、FPST 中の子どもと保護者の発言や行動を観察分析するために、ビデオ撮影した。

### (3)評価指標

FPST 前後における以下の質問紙調査、及び FPST 中の対象児の言語、非言語反応を指標にその有用性を検討した。上記の質問紙調査実施時期は、FPST 全プログラムの実施前と実施終了時の 2 時点とした。

## 質問紙調査

対象児

) 対人的自己効力感尺度(松尾・新井,1998)全15項目で構成される。

) ストレスコーピング尺度 (Stress Coping Scale SC-S; 嶋田 & 三浦, 1998)

3つの下位尺度(積極的対処、あきらめ、思考回避)で構成される。

)

保護者

)家族の自信度アンケート(the Confidence Degree Questionnaire for families: CDQ) 自分の子どもの障害の受容や行動への理解、対応の自信について家族の自信度を評価(18項目)(Okuno.et.al.,2011)4件法。

)子どもの行動チェックリスト(CBCL; Child Behavior Checklist, Achenbach,T.M.)4~18才用。

)ソーシャルスキル尺度(Social Skill scale)(上野、岡田)。小学生用では、4つの下位尺度(集団行動、セルフコントロールスキル、仲間関係スキル、コミュニケーションスキル)、中学生用では、3つの下位3尺度(集団行動、仲間関係スキル、コミュニケーションスキル)で構成される。

)対人応答性尺度

Social Responsiveness Scale:SRS

4つの下位尺度:社会的気付き、社会的認知、社会的動機付け、自閉的常同性で構成される。

## セッション中のビデオ録画分析

全12名のうち分析可能な対象児2名について、FPST実施前後の遊び場面を設定し、その際に、対象児が3秒以内に相手に向けて表出した言語、非言語反応を評価した。分析内容は、方略内容(譲歩、ルールの導入、謝罪、説明、代償、接近・合流、接近・合流の誘導、距離取り、講義、抵抗、おどけ、注意の転換、介入要請、懇願、劣位性表出)とし、それぞれのRate per minute(1分間の発生頻度)を算出した。

0.1/RPM以上の値を有意な差とした。The Noldus Observer<sup>R</sup>XTを用い、FPST実施者とは異なる観察者2名によってコーディングした。

## 4. 研究成果

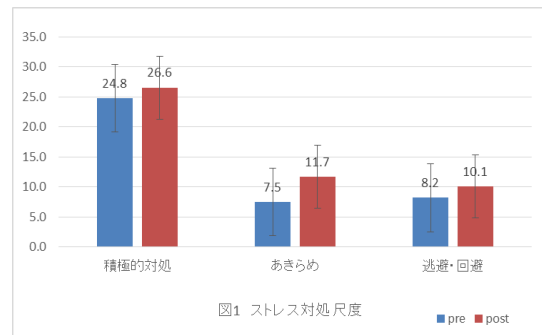
### (1)質問紙調査の結果

対象児

)対人的自己効力感尺度(松尾・新井,1998)本調査では、有意な改善が見られなかった。

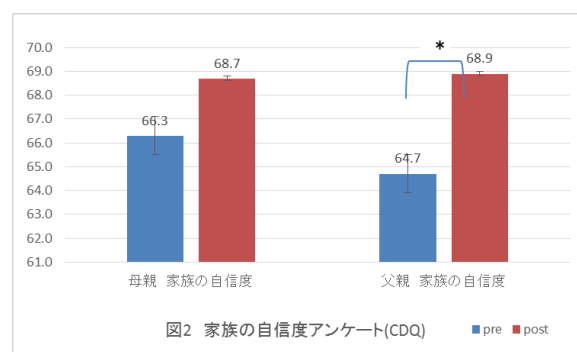
)ストレスコーピング尺度 (Stress Coping Scale SC-S; 嶋田 & 三浦, 1998)

SC-S(10人)では統計上有意差はみられなかったが、全3要因“積極的対処(25.1 27.2)”、“諦め(9.7 14.5)”“思考回避(10.4 13.4)”で平均値に改善がみられた。



### 両親の結果

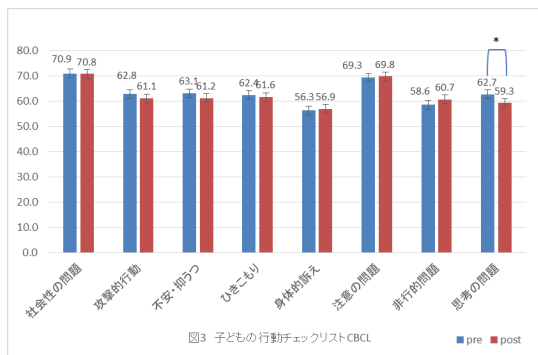
)家族の自信度アンケート(CDQ) 母親(12人)66.3 68.7、父親(9人)64.7 68.9で改善がみられた。特に父親では、有意な改善がみられた( $t(8)=-2.93, p<.05$ )。



)子どもの行動チェックリスト(CBCL)

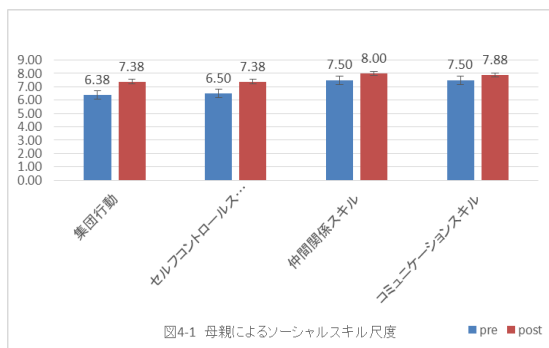
CBCL 総T得点、(67.5 66.9)、外向T得点(61.5 61.7)、内向T得点(61.7 62.2)となり、総T得点のみで平均値に改善がみられ

た。また、下位尺度の「思考の問題」で、有意な改善がみられた ( $t(11)=2.33, p < .05$ )。

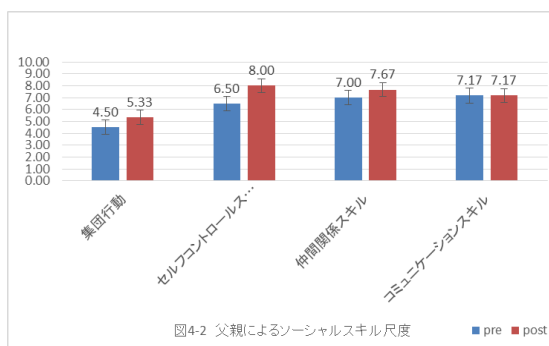


) ソーシャルスキル尺度 (Social Skill scale)

小学生の母親(8人)では、下位尺度4項目：集団行動(6.38 7.38)、セルフコントロール(6.50 7.38)、仲間関係(7.50 8.00)、コミュニケーションスキル(7.50 7.88)で平均値に改善がみられた。中学生2名では、下位尺度2項目：仲間関係(9.0 9.5)、コミュニケーションスキル(6.5 8.0)で平均値に改善がみられた。

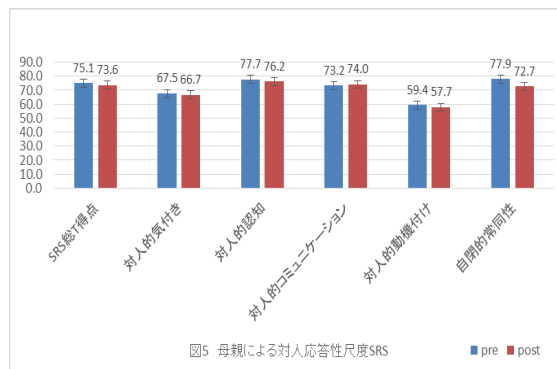


父親(6人)では、下位尺度3項目：集団行動(4.50 5.33)、セルフコントロール(6.50 8.00)、仲間関係(7.00 7.67)で平均値に改善がみられた。



) 対人応答性尺度

Social Responsiveness Scale: SRS に関して母親(11人)では、総T得点(75.1 73.6)、社会的気付き(67.5 66.7)、社会的認知(77.7 76.2)、社会的動機付け(59.4 57.7)自閉的常同性(77.9 72.7)で平均値に改善がみられた。



一方で、父親(8人)では、平均値に改善がみられなかった。

(2)セッション中のビデオ録画分析の結果

A児では、実施後に「説明」の方略について0.21 0.62に、B児では、0.21 0.44に上昇した。

(3)考察

各質問紙評価に関して、まず、統計上有意差がみられたものについて考察する。

家族の自信度アンケートにおいては、両親ともに改善がみられ、特に父親では、有意な改善がみられた。これは、両親で子どもの持つ問題、また、親の子どもに関する問題に取り組んだ結果、父親においては、子どもの対応への自信につながったものと考えられる。

子どもの行動チェックリスト (Child Behavior Checklist; CBCL)の「思考の問題」での改善については、本FPSTが、認知的な思考を促すトレーニングであるので、この項目に改善が見られたことは、認知的変化から行動への変化につながった結果と考えられ、大きな成果といえる。

次に、平均値に改善がみられた質問紙項目を考察する。ストレス対処尺度に関しては、

思考回避で改善が見られたことより、今回、対象児は、一時しのぎの逃避・回避的対処方略を選択せず、積極的対処といった問題解決的対処方略を選択する傾向が高まってきていることが示唆された。また、ASD 児が、一つの方略に固執しがちな特性を持つ中、「諦め」という妥協を示す方略も多く用いられるようになったことが示され、これらの結果は、ASD 児のストレスに関する対処のレパートリーに広がりが見られたといえる。

対人応答性尺度(SRS)では、実施前後で、相互的対人行動と関連する ASD 症状で改善が見られた。また、ソーシャルスキル尺度では、集団行動、コミュニケーション等、各下位項目で改善が見られ、今回、いくらかのソーシャルスキルの獲得に伴い、対人行動にも改善が見られたものと考えられる。

第二に、ビデオ分析の結果では、2 事例のみの分析ではあるが、2 事例とも「説明」の方略が増え、自身の行動の理由を説明することが可能となっていることが示唆された。

以上より、本 FPST において、子どもが問題解決スキルを学習したことによって、日常場面での問題行動を減じることが可能となったと考える。また、親に関しては、子どもへの対応に関する自信が高まった。

統計上有意差はないが、今回、対象児が、ソーシャルスキルの獲得、ストレス対処のレパートリーを広げ、対人行動に改善が見られたこともあり、現時点で、本 FPST での有用性が示されたといえる。今後は、より多数例で FPST を実施し、効果の検討に当たる必要がある。

## 5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

奥野 裕子, 加藤 久美, 山本 知加, 村田

絵美, 福田 祥子, 松崎 順子, 富永 康仁, 平田 郁子, 橘 雅弥, 酒井 佐枝子, 毛利 育子, 鷹野 雪保, 谷池 雅子 大阪府堺市における 4・5 歳児発達相談事業後の支援として 短縮型ペアレント・トレーニング(堺市版)の試み、日本小児保健研究、査読有、73 巻 1 号 (2014)、88 - 95  
酒井 佐枝子, 和田 奈緒子, 奥野 裕子, 辰巳 愛香, 山本 知加, 吉崎 亜里香

Broad Autism Phenotype Questionnaire日本語版(BAPQ-J)の妥当性と信頼性の検討 臨床精神医学 査読有、43巻8号 (2014) 1181 - 1190

Hasegawa Kyoko , Sakai Saeko , Okuno Hiroko [他] Correlations between the Broad Autism Phenotype and social cognition among mothers of children with Autism Spectrum Disorder . The Japanese journal of research on emotions) 査読有 21(3) (2014) 143 - 155

[学会発表](計 1 件)

奥野裕子、荒木田美香子、毛利栄子、発達障害児の親へのペアレントトレーニング、家族看護学会、2014年8月10日 岡山、招待講演

[図書](計 0 件)

## 6 . 研究組織

(1)研究代表者

奥野 裕子 (OKUNO HIROKO)

大阪大学・連合小児発達学研究所・講師

研究者番号 : 40586377

(2)研究分担者

該当者なし

(3)連携研究者

該当者なし